第三章　民俗信仰を通してみた地方文化再編の実態

―下越地方の曹洞宗寺院と優婆尊信仰―

松　崎　憲　三

はじめに

三途の川のほとり、衣領樹近くに居て亡者の衣を剥ぐことを職掌とする奪衣婆は、十王信仰とともに流布した。経典の上では、唐の蔵川が撰述した『預修十王生七経』に基づいて平安末期に偽経としての『発心因縁十王経』が成立し、二七日の初江王の場面に奪衣婆（三途河嫗）が登場するに至った。そうして鎌倉期以降、この『発心因縁十王経』に基づいてさまざまな絵画が描かれ、彫像もつくられ、また文献にもしばしば記載されながら庶民層に浸透していった。ちなみに、今日広く流布している半跏趺坐の姿態に定着するのは室町時代中期を転機としてそれ以降のことである。

筆者は、先に中間報告として「奪衣婆信仰の地域的展開～秋田県下の事例を中心に～」なる小論をしたためた。[1] 姥神信仰その他と習合し、日本的展開を遂げた奪衣婆信仰の現実の姿を、地域の状況に即して分析することがその目的であった。秋田県下の寺院や小堂には、「小町百一歳の像」、「小町九十歳の像」なるものがあって、安産、子育て等の信仰対象となっていた。いずれも半跏趺坐の木像で恐ろしげな形相をしており、「小町婆（ばば）さん」などと呼ばれる奪衣婆にほかならない。これらには、奪衣婆（さらには姥神）信仰が元にあり、それが小町と見なされるに至ったという共通点が見出せた。秋田県下では地獄極楽図の類が多くの寺院に伝えられ、絵解きも盛んに行われていたようで、十王信仰・奪衣婆信仰が盛んという宗教的背景があった。一方、小野小町が雄勝郡の旧小野村出身で年老いて京都から故郷へ戻ったという伝承を足がかりとして、豊かな小町伝承が育まれていたが、この両者がドッキングしたのである。身近にある素材を巧みに活用しながら新たな民俗を産み出していくという、庶民の創造力のたくましさを垣間見たような気がした。

小稿はその論に引き続くもので、新潟県下越地方の曹洞宗地帯をフィールドとして分析を試みようとするものである。

下越地方の曹洞宗寺院では、優婆尊（奪衣婆）を祀る厨子がよく見かけられ、そのほとんどが安産・子育て祈願、病気平癒等の信仰対象となっている。そうしてそれらの寺院は、本末関係にあるものが少なくないのである。各教団は、中世末・

近世初頭以降、葬祭を前面に押し出しながら地域社会に浸透して行く。曹洞宗寺院の下越地方への扶植（浸透）と、優婆尊（奪衣婆）信仰とは何かかかわりを持つものなのだろうか。一方、それを受容する地域の側は、それをどういう形で受け止めたのだろうか。これが小稿の課題であり、阿賀野市出湯の華報寺に焦点を当てながら報告することにしたい。

曹洞宗寺院の地方への扶植過程をおおまかにトレースする一方、小本山としての華報寺に焦点を当て、地域と接点を持たざるを得ない末寺の動向、さらには地域毎の受容のあり方の考察を通して、重層的な民俗信仰の動態に少なからずアプローチしたい。

一、曹洞宗寺院の越後への扶植

曹洞宗寺院の創立を全国的に見ると、南北朝期六三カ年の創立寺院数一五八カ寺に対して、室町・戦国時代一七九カ年の創立寺数は一一五三カ寺となり、にわかに増加した。新潟県下では、南北朝期には峨山韶碩（総持寺二世）の法流が上越・下越・佐渡に扶植されたが、この時期に開創または改宗の曹洞宗寺院は一〇カ寺にすぎなかった。ところが室町時代に入ると全国的動向と軌を一にし、著しく増加するとともに、越後曹洞禅の一大拠点が成立する。応永元年（一三九四）、傑堂能勝による耕雲寺（村上市門前）の創建である。『新潟県史　通史編2・中世』によれば、傑堂は楠木正成の三男といわれ（正しくは正成の四男正儀（まさのり）の子＝筆者注）、峨山の五哲・太源宗真の法孫であり、梅山聞本の法嗣である。耕雲寺は、後世直末八一カ寺、孫末以下七〇八カ寺の門葉を有する越後曹洞禅の最大の本寺（仮に中本山としておく＝筆者注）として発展を遂げた。[2] ちなみに阿賀野市（旧笹神村）出湯の華報寺は、文明九年（一四七七）耕雲寺六世太庵梵守によって創建された寺院で、現在末寺一一カ寺を有している。

曹洞宗に限らず、各教団の地方への扶植は葬祭儀礼を担うことを主たる目的とするものであったが、圭室締成が中世禅語録を統計分析した結果によれば、「一二〇〇年代の前半には、ほとんど一〇〇％座禅であったものが、一四〇〇年代には、

表１　霊験譚的説話を持つ曹洞禅僧一覧（広瀬良広による）

分類	項目	人名（）内は没年	人数	人数合計
奇瑞	1 寺院建立に関する奇瑞	天真（四三歳）・天慶（?）	2	2
神（あるいは仏）の助力を受ける	2 神（あるいは仏）から出生・出家・修行上の助力を受く	梅山（四七）・竺山（三九）・器之（六八）・拈笑（?!）・虎禅（三八）	5	29
	3 神（あるいは仏）から力量を認められる	了然（?三五）・竹居（四六）	2	
	4 神（あるいは仏）が布教地あるいは寺院建立地あるいは仏）の助力を受けての布教・寺院建立を示す。神（あるいは境内地に案内す	慶屋（四四）・大寺（?）・梅谷（?）・月庵（?）・宇栄（三）・寄寄（?!）・即庵（?）・冷嶽（?）・瑞岡（三八）・宇栄（三）・了庵（四二）・如仲（?三）（近隣の神と廃寺であった時からの本尊との二説話あり）・盧嶽（?）・大林（?）・大路（三八）	11	
	5 神（あるいは仏・蛇）が寺院建立地あるいは境内地に案内す（この場合、4に比べると、より近隣の神や土地神のことが多い）	了庵（四二）・如仲（?三）（近隣の神と廃寺であった時からの本尊との二説話あり）・盧嶽（?）・大林（?）・大路（三八）	5	
	6 山神・竜神（以前からの土地神・守護神）が力量を認め慶賀などを現ず。または護法神となる	天庵（?三）・慶屋（四三）・月庵（?）・桃岳（?）・一径（応永年間）・智翁（?）・曇英（三五）	6	
	7 神に授戒	無著（三九）	1	
神人化度（神に授戒、のちその礼を受く）	8 神に授戒、のちに出家・在家の援助によって寺院建立さる。あるいはのちに紫衣下賜さる。	大尊（四三）・大空（?）	2	13
	9 神に授戒（あるいは説法）、神のちに護法神となる	了庵（四二）（三神との説話あり）・月江（?）	2	
	10 神（あるいは毒竜）に授戒、水（池）・塩泉・甘泉・温泉が湧く	無著（三九）・了庵（四二）・定竜・仲翁（?）・曇英（三五）・金岡（?）	6	
	11 神に助力（あるいは説法）、神・特殊能力を禅僧に与う	実庵（四三）・天海（三七）	2	
悪霊鎮圧	12 悪霊・妖怪を鎮めて、毒竜を済度す。照霊（霊人）に引導（葬送）。ドゥを駆除す	源翁（?九）・梅山（四七）・天先（?八）・大空（三九）・高峡（?）・谷火焔・竜を鎮める）・盛岳（?）・天海（?）・光国（?）・大用（?）	8	11
	13 群賊を説諭す	説通（?）	1	
	14 悪疾をもたらす山神に授戒。疫病の山神の廟を打破す	天先（?八）・節竜（?）	2	
その他	15 その他（かつて、船を覆す竜のために建立された寺を再興す）	大獄（三七）	1	1

ほとんど一〇〇％葬祭宗教化している」という。[3]

ところで、曹洞宗の開祖・道元は「只管打座」を唱え、伽藍神を例外として龍神や地蔵信仰等の通俗的信仰は否定的に位置づけていたとされる。その曹洞宗において、通俗的信仰を積極的に取り入れる端緒となったのは瑩山であり、瑩山は能登国総持寺を改宗・中興するに当たり、荘民に放光菩薩像（観音像・地蔵像）の安産利益を唱導したという。[4] この瑩山を引き継ぎ、通俗的信仰を積極的に取り入れていったのは弟子の峨山であり、『峨山韶碩和尚法語』には、かまど神を調伏する話が収められている。[5] これらと関連して広瀬良広は「奇端」、「神（あるいは仏）の助力を受ける」、「神人化度（神に授戒、のちその礼を受く）」、「悪霊鎮圧」等、中世の曹洞禅僧で霊験譚的な説話を持つ者が四九人確認できるとしている[6]（表1参照）。在地の神が人の類で現われ、

禅僧に化度されたり具体的手助けを行う類の霊験譚を「神人化度説話」と称するが、中世曹洞宗は、この説話を巧みに活用して地方への扶植をはかったとされており、それは峨山派に顕著だという。[7] 越後最大の本寺・耕雲寺を応永元年（一三九四）に開基した傑堂は峨山の法脈に連なる者であり、[8] 華報寺の開基（文明九年－一四七七）に与ったのもこの耕雲寺の六世太庵梵守に他ならない。

なお、曹洞宗寺院の開創の経緯を見ると、既にあった他宗派の寺院を改宗・中興したと伝える側が案外多い（総持寺もそうであった）。そうして、その際他宗派の神仏をそのまま取り込んで、釈迦如来を本尊とする筈の曹洞宗寺院に、阿弥陀や観音を本尊としたり、境内にあった神祠を残して境内神とする側も見られた。その辺りに留意しながら、華報寺の優婆尊をめぐる信仰について分析を加えることにしたい。

二、華報寺の優婆尊信仰

華報寺は、旧笹神村の東に連なる五頭連峯（主峯約九〇〇メートル）の西麓に位置する。本尊は釈迦牟尼仏である。昭和十一年（一九三六）に市島春城によって著わされた『越後野志』に次のように記されている。[9]

華報寺、白河荘出湯村ニ在、大同四年己丑三月空海師草創建立、五頭山福性院海満寺ト名ヅク、寺領五百七拾八石九斗三升、文明中曹洞宗トナリ、耕雲寺六世大庵和尚ヲ開基トシ、華報寺ト改メ名ヅク、末寺二十余寺アリ、昔時火災ニテ寺録ノ証書ヲ焼、以後寺領ヲ失ヒ、イマハ寺後ノ一山ヲ領ス、周辺一里余、杉松諸木多シ、寺中温泉アリ、又薬師堂、慈王殿、白山神祠アリ、安永中、寺後山中ニ三十三観音堂ヲ建、寺内ニ水原城主ノ墳墓二石塔アリ、星霜ヲ経ルコト久シテ碑文湮滅シテ不分明

尚、補足すれば、大同年間（八〇六～八一〇）に空海が五頭山を開き山頂に五社権現を勧請、山麓に堂宇を建立したのが開基と伝える。鎌倉時代には五頭山海満寺（真言宗）と称し、四院三二坊を数えるほど繁栄したが、暦仁年間（一二三八～三九）に火災に会い荒廃したという。南北朝期に編纂された『神道集』に「出湯の花宝寺の長老云々」とあり、この頃までに寺号を改称、文明年間に村上の耕雲寺六世大庵梵守が住職となって、真言宗から（天台宗三代を経て）曹洞宗に改め、寺号も華報寺と称するに至った[10]。

本堂は寺山と称される山を背にして西向に建ち、裏は墓地になっている。寺の裏手の北側にある沢が経沢、南側の沢が目洗沢と呼ばれ、この付近から中世の蔵骨器や石塔が出土しているという[11]。またかつては、「地獄の釜の蓋」と称される大石や、「血の池（地獄）」と呼ばれる池もあったようで、二瓶武爾は「今より三十年位前迄は（明治末頃＝筆者注）、未だ華報寺の境内に、地獄釜、血の池というのが残って居り、賽の河原及び地蔵尊が今尚ほ名所として現存しているところを見れば、昔は優婆尊たる懸衣媼と関連した地獄の形式が全部あったものと推測される」と指摘している[12]。血の池と地獄の釜の蓋に関しては、それらしきものが見受けられるものの確認はできない。しかし賽の河原と地蔵尊は、出湯の北はずれにあってえもいわれぬ雰囲気を醸し出している。また、華報寺の境内には弘法大師の秘密加持によって湧出したという「漲泉窟」があり、古くは湯治客や参詣者の（今では車で通う近在の人々の日常的）入浴施設として利用されている。

二瓶は華報寺の優婆尊について、「優婆尊たる懸衣媼」と表現していたが、「華報寺略縁起」を見ることによって、それを理解することができる。

華報寺略縁起

正面の御厨子の内に安置し奉る當國北蒲原郡出湯村五頭山華報寺の優姥尊像は本地毘盧舎那仏の御垂跡にましまして衆生應化の大悲尊なり。

抑も抑も其由来を尋ぬるに人皇四十五代（ママ）の帝聖武帝の御代天平の年行基菩薩諸国濟度の砌り當国へ御下向被遊出湯村

に暫く御逗留の節五頭山之麓一樹の上に紫雲雲愛雲逮ければ諸人奇異の思いをなし行基菩薩にこの事を問奉るにこれ即ち霊木なり如何なる佛像を彫刻し奉る可きやと御思慮の折柄俄かに天地震動して一帯の黒雲舞下り身の丈一丈八尺餘りの恐ろしき老婆其中に現れ我は是れ冥府三途河の邊に居る懸衣御媼なり外には極悪忿怒の相を現すと雖ども内には慈愍大悲の涙を流し罪苦の衆生を救ふは我が本願なり汝早く吾が形像を刻み末生衆生をして結縁を得せしむべし若し一度縁を求むる者は現世は安穏にして後生は必ず佛果に至るべしと御誓ひ遊ばさるる御言葉いまだ終わらざるに咨嗟不思議なるかな忽ち極悪忿怒の相を變じ却って三十二相八十随形好紫磨黄金の肌を現し光明赫々として十万を照らしたまひ我はこれ毘盧舎那佛なりと仰せられ消ゆるが如に虚空に飛び去り玉ひしからば行基菩薩五躰を地に投じ歡喜の涙に咽び給ひ一刀三禮して彫刻し奉る御尊容なり今昭和六年に至って既に一千二百年なり吁嗟年歴久しうして方便利生も亦擧げて數へ難き事世の人の善く知る所なり此の尊像は或は六部の身を現して諸國に結縁を求め或は醫師の身を現して難産難病の苦を救玉ふ種々の霊驗一々記し難し若し此の尊像を一度禮拝する輩は現世は無病息災にして後生は速かに佛果を得ること疑ひなし今茲に開帳し奉るは末世衆生に結縁する者也。

奄　御　眞　言

口　波　羅　摩　尼　娑　婆　詞

華　報　寺

ここには、華報寺の優婆尊像は天平年間に行基菩薩が出湯逗留の折に刻んだものであること、優婆尊はまた三途河に居る懸衣媼（奪衣婆）でもあり、毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）を本地仏として現世・後世の二世安楽を約束してくれる存在であること、等々が記されている。ちなみに傍線の「今昭和六年に至って」云々の部分であるが、優婆尊関連行事のたびごとに巻子物の縁起が読唱され、その時々の年号が読み上げられ、たまにはそれが印刷物として配布されることがある。従ってこの年号にはさほど大きな意味はなく、それゆえ縁起の成立年代もはっきりしないのである。

『総合佛教大辞典』によれば、毘盧舎那仏は華厳宗の教主であり（東大寺の大仏はあまねく知られている）、法相宗や天台宗でもそれなりの位置付けがなされている。一方真言宗では理智不二の如来と位置づけ、大日如来と同体と見なすなど重要な仏と見なされている。曹洞宗に関しては、残念ながら何ら言及されていない。[13] なお、優婆尊が山岳信仰とかかわりが深い点についてはかつて言及した通りである。[14] こうしたことから、華報寺の前身真言宗・五頭山海満寺当時からの信仰を取り込む形で、華報寺の縁起が出来上がった、というように考えることもできる。出湯在住の研究者、川上貞雄も同様の見解を示されている。[15]

華報寺の本堂外側両脇の柱に一対の看板が掲げられ、（本尊から見て）左側のそれは「曹洞宗華報寺」と記したもので、右側には「大悲優婆尊應現道場」と高らかに謳ったものが掲げられている。従来優婆尊は境内の小堂にあったらしいが、昭和三十年（一九五五）に本堂を改築した際に本尊右脇に移された。これによって近年、いかに華報寺で重要視されている存在かが理解されよう。地蔵や閻魔も祀られているものの、境内の小堂及び光明殿（開山堂）にとバラバラに安置されている。また、一〇年ほど前に、庫裏を建て替えたそうであるが、現在庫裏のある場所が元来湯治宿で、大祭に訪れた講のメンバーが寝泊りしていたそうである。今でも本堂から温泉施設につながる廊下の左右に数部屋あるものの、ほとんどの人が車を使った日帰りで、泊る人は全くと言って良いほど見かけられない。

優婆尊の大祭は三月初丑（涅槃会でもあり、団子まきもする）、六月十九日、九月十九日、十一月五日お湯まつりと合わせて実施されるもの、以上年間計四回である。古くは前夜がお逮夜、翌日が命日と称する大祭で二日間にわたるものであった。また、六月のそれは山開きと重なり、早朝四時頃から五頭山へ登拝し、昼に下山して華報寺で昼食をとって解散したものという。講のメンバーの高齢化に伴って、一〇年ほど前から登拝は中断されている。

ところで、大正期の五頭山登拝の盛況振りについて、登山家の藤島玄は次のように記している。[16]

初めて五頭山へ登ったのは大正八年五月であった。大正時代は、出湯の優婆尊信仰が盛んであった。新潟市では無産階

級の中年の主婦や老婆達の熱狂的な信者がおった。対象の優婆様は、三途ノ河の渡守の懸衣媼で、死出の旅路の罪人の白衣を剥ぎ、柳の杖にかけて枝の垂れ方で罪の軽重を計るというショウズカノバアサマであった。毎月十九日に講中宿に集って読経し、霊がのり移ると、座ったまま飛び上る離れ業をやる巫女（みこ）も珍しくなかった。こうした信者たちの団体が、水原駅から羽黒へ出湯へと、土埃をあげて歩いていって、お堂に参籠したものである。五頭山開拓の先駆的役割を果たしたことは大きく、五頭五峰に石仏を祀ったのも、こうした講中である。現在でも白衣の信仰巡拝の団体が登っている事実を知ったら、驚く登山者もあるにちがいない。

藤島は、出湯・華報寺や後述する羽黒・高徳寺の優婆尊講による登拝を、五頭山登拝の魁的存在として評価しているが、この中で講の実態をさりげなく暗示している。つまり、講のメンバーの中に、シャーマン的な資質を持った巫女がいる、という点についてである。筆者は、二〇〇九年六月十九日の華報寺における大祭に参加させていただく機会を得た。行事は午後二時から二時間余りにわたるものであった。その時の様子を以下に紹介する。

当日の参加者は、三条市・大竹講中、見附市・石田講中の他は個人参加者で、総勢三〇名程度であった。高齢者が圧倒的に多く、男性五名ほども含まれていた。母子一組と初参加の中年女性二人の姿も見られた。

(1) 住職が般若心経を唱え始める。

(2) シャーマン的な資質を備えた女性が（後で聞くと、養子に入った住職の実の母親で、どうやら別当らしい。別当とはシャーマン的な資質を持つ、あるいはお加持に長け（双方持ち合わせている人）、しかも人徳のある人が寺院側から称号を与えられた人で、講元は全て別当である）、その間参詣者の間を回り、一人ずつ頭を両手で触れたり数珠で体をさすったりしながら当人の心的・肉体的状況を判断し、息を吹きかけたり、数珠で体をさすったり背中を強く叩きながら災厄の除去に努めている様子であった。これを「お加持」と称するが、筆者もその「お加持」を受ける羽目に陥った。彼女は筆者の頭を両手でさわり、「重い、重い、疲れているな、あまり悩むな。何か悩み事があったら緑多いこ

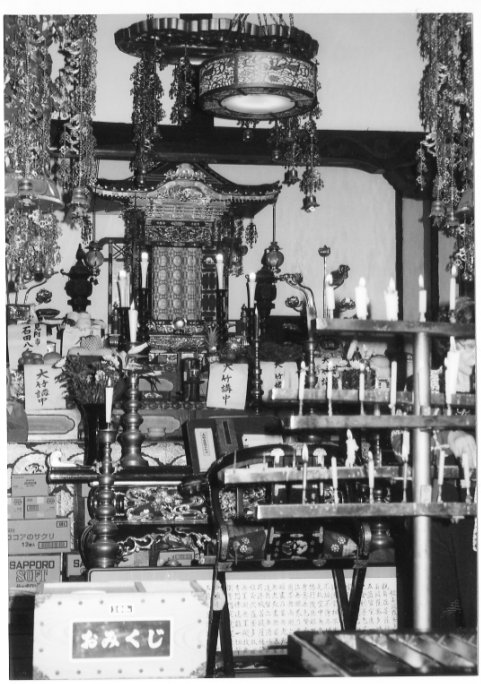

写真１　優婆尊の厨子（阿賀野市華報寺）

の華報寺に赴き、心を癒しなさい」と対処法を示してくれた。その上で後向きにさせられ、背中をドン、ドンと痛いほど叩かれて終えた。前住職婦人が健在であった五年ほど前までは、四人ぐらい別当がいてその役を担っていたそうである。

(3) この間住職は、依頼に応じて先祖（含む水子精霊）の回向を行い、また身体健固、家内安全、就職成就、学業成就等々の祈祷を行っていた。

(4) その後で住職は、参詣者の方を向き、般若心経をパラパラ繰って（但し「理趣分」の一巻のみ）厄祓いらしきことをし、最後に「華報寺略縁起」（巻子物）を取り出して読み上げ、儀礼を終えた。そうして先の別当を先頭に優婆尊像の前に一同順に進み出、お参りをする。この時も彼女は一人一人の背中を数珠でさすりながら、感じたことを各人に伝えていた。

(5) これが行事の全てであり、各自お札をもらい受けて流れ解散となる。ただし体の具合が悪い人達数人が残って、大竹講、石田講の別当二人か

ら「お加持」をしてもらっていた。かつて参詣者の多くが宿泊していた頃は、別当が患部にお灸をすえ、頃合を見はからって温泉につかるよう指示する光景も見られたという。

当日の参詣者は、ほとんどが新潟県内の人のようであったが、先祖の回向、諸願祈願の依頼者を見ると、新潟市、長岡市、三条市、見附市といった県内各地域の他、川崎市や千葉市、遠くは北海道の函館市、北斗市等の名もあった。出郷者やかつて講が存在した北海道在住の人達が、参詣できないまでも回向や祈願を依頼してくるのである（実際石田講関係者が数人北海道から出向いていたようである）。

昭和四十年（一九七〇）刊の『水原郷』には、「講中は新潟、沼垂、三条（二ヶ所）、小須戸、見附、札幌、函館などにあり、春秋二回は定期的に参詣している」と報告されている。[17] しかし、今や大竹講と石田講、この二つが現存するにすぎず、従って正規の別当は二人しかいない、というのが実状である。このうち大竹講の活動については、後ほど報告することにしたい。なお、以上の報告からすれば、華報寺の優婆尊信仰は、シャーマン的な資質を有した別当を中心に結集した講によって維持されているかに見えるが、必ずしもそれだけではない。旧水原町や旧新津市あるいは五泉市といった近在からは、多くの人達が安産祈願に訪れていたのである。それは、羽黒・高徳寺の場合も同様であるが、これについても改めて触れることにしたい。

三、華報寺末寺の優婆尊信仰

下越地方の優婆尊像は、華報寺の他以下の末寺四ヶ寺に現存する。

(a) 新潟市中央区西堀通り・法音寺（華報寺一世・太庵梵守和尚開基、文明年間・一四六九～八七）。

(b) 阿賀野市中島・長福寺（同七世・快翁源恕和尚開基、弘治年間・一五五五～五八）。

(c) 阿賀野市次郎丸[18]・高徳寺（同八世・立山昌健和尚開基、永禄年間・一五五八～七〇）。

(d) 阿賀野市里・光明寺（同十一世體厳長全和尚開基、正保年間・一六四四～四八）

これらは、支院（末寺）開創に際して移奉されたものと考えられている。[19] 本節ではこれら四ヵ寺の優婆尊信仰について報告するとともに、近代初頭優婆尊を祀るに至った、新発田市中曽根・正竜寺のそれについても、合わせて取り上げることにしたい。

(a) 法音寺（新潟市中央区西堀通り）

華報寺同様太庵梵守の開基によるが、今日では華報寺と全く交流がないという。但し、先代は時折華報寺に出向いており、現住職もお伴した記憶があるということである。同寺は明治期の新潟大火によって灰燼に帰したが、先々代が伽藍を復興し、先代が釈迦牟尼仏をはじめとして脇持や優婆尊を揃えた。従って優婆尊像そのものは新しいものだが、本堂入口左側の厨子に安置されている。右手を立て膝の上に置き、左手に毛髪を持つ木像で、葬頭河の婆とも呼ばれている。戦前までは優婆尊講もあったようだが、今日では優婆尊関連行事は存在しない。ちなみに寺院の年中行事としては、正月三ヶ日の三朝御祈祷、春秋の彼岸施食供養、七月第一日曜日の盆行事が執り行なわれている。

(b) 長福寺（阿賀野市中島）

「長福寺文書」によれば、「本尊は東方薬師如来、天平十六甲申年（七四七）行基菩薩当国下向の折、蒲原郡七島村に一宇の草庵を建立、霊夢により自ら刻せる薬師如来像を安置して、七島山長福寺と号す。開基は弘治二丙辰年（一五五六）源恕禅師と伝う。後、阿賀野川破提の際、堂宇流失せるため中島村に地を定めて再建、本尊を移して中島山長福寺を山号を改む。寛政三壬午年（一六六二）新たに堂宇を建立するも、寛保二壬戌年（一七四二）雷火により如来像のみ残して焼失。後再建して今日に至る」という。[20]

おそらく現在の優婆尊像は、寛保二年の雷火の後に造られたものだろう。半跏趺坐の木像で頭に真綿をかぶり、背中にも

う一躰の小さな優婆尊（奪衣婆）像を嵌め込んでいるという、特異な形式のものであった。広い意味で胎内仏を持つといえるのかもしれない。この優婆尊は、本堂斜め前の御堂に薬師如来、不動尊、豊川稲荷と伴に祀られている。このうち豊川稲荷は初午の時に祀り、お薬師さんの縁日は毎月の七日（大祭は五月）であり、これらの時に合わせて不動尊、優婆尊を祀るものの、優婆尊独自の行事はない。また薬師如来の縁起は行基とからめたものが存在する一方、優婆尊に関しては言い伝えも特になく、長福寺側は薬師如来をもっぱら檀徒・信徒にアピールしている模様である。

（c）高徳寺（阿賀野市次郎丸）

高徳寺は大字次郎丸にあるが、同寺の管轄化にある優婆堂は「元禄郷帳」に次郎丸枝郷と記されている羽黒に存在する。この羽黒の優婆尊に関しても巻子物の縁起があって、やはり行事のたびごとに読み上げられるが、内容は華報寺のそれと大同小異である。羽黒の優婆堂の説明板には、この縁起に沿って行基の作であることを記した後、次のように説明されている。

その後、天正十四年（約四百年前）華報寺住職八代和尚が夢を見られ、和尚に「我を十字街に安置せよ。されば多くの人々を救うであろう」と告げられたので、和尚現在地にお堂を建立し安置したものである。

この仏は無住の仏といって、六部に身を変えて無縁の衆を救い、あるいは医師の身をやつして難苦の産婦を救うなど霊験浅くないといわれ、広く尊信を集めている。縁日は毎月十九日、二十日の両日で、当日は参詣者で特に賑わっている。現在のお堂は今から二百八十年前に建立されたものである。

平成十四年建

笹神村教育委員会

守護所　高徳寺

図１「仏説大蔵正経血盆経」（高徳寺）

夢のお告げがこの種の縁起のモチーフであるが、これによって、優婆堂が羽黒にある理由とその信仰内容が知られる。今日では羽黒の優婆尊信仰に勢いがあり、出湯の本寺のそれを凌駕するほどであるが、高徳寺には明和八年（一七七一）銘の「仏説大蔵正経血盆経」なる版木があって、かつては一枚刷りのこの経文を信徒に配布していたようである。この種のものは華報寺にもあって、近年までは優婆尊の御影とともに販符していたという。さて、高徳寺の血盆経の内容は、釈迦の十大弟子の一人、目連尊者に関する伝説を基調としたすこぶる類型的なものである。すなわち、目連が地獄で苦しむ女人を見て、その理由を質したところ、獄主がこれに答え、女人は出産の際に出血をし世界を汚すからだという。目連は神通力をもって大菩薩および天龍八部を呼び出し、あるいは経文を展誦して女人を救済したというものである。図１がその刷り物であるが、経文の中央部に忿怒の形相の優婆尊を配しており、地蔵や如意観音ならぬ優婆尊が血の池地獄からの救済者として位置づけられている。[21]

ところで、偽経である『血盆経』が中国から日本に伝来したのは十五世紀頃と推定されており、先ず貴族社会に浸透した。それが太子信仰などと関連づけられ、広範に中世日本社会に受容された。熊野比丘尼が布教に与っていたこともよく知られている。そうして、『血盆経』の写本の分布を調べた成清弘和によれば、先ず浄土宗が近世の早い時期にこの経典を取り入れて布教活動を展開したという。一方、曹洞宗ではやや遅れをとったものの、積極的に活用したとされており、[22]そのことは成清が作成した『血盆経』の写本所在一覧を見れば明

表２「血盆経」写本の分布一覧表（成清弘和による）

	版	所在地	現在の宗派	年代	堕地獄の原因	版系
A	統蔵本					
B	元興寺本					
C	芦峅寺本	富山	天台系修験	室町末？		元興寺版
D	永平寺本	福井	曹洞宗	明治	産の血	源正寺版
E	源覚寺本	東京	浄土宗	一八四四以降		
F	宗賢寺本	新潟	曹洞宗	一七六三？		
G	源正寺本	秋田	曹洞宗	一七五六		
H	西来院本	秋田	曹洞宗	江戸中期？		
I	大安寺本	青森	曹洞宗	昭和		
J_1	正泉寺本	千葉	曹洞宗	一九三四		
J_2	正泉寺本	千葉	曹洞宗	一七八三		
J_3	統蔵の頭注					和解版
A	西大寺本	奈良	真言律宗	江戸	産の血と月水	
K	「和解」本		浄土宗	一七一三		
L						

らかである。曹洞宗寺院に多く伝えられており、そのうち(F)宗覧寺本（新潟）のものは一七六三年頃のものと推測されているが、高徳寺のもの（写本ではないが）はそれからわずか八年時代が下ったもので、比較的早い時期に取り入れて、優婆尊と結びつけながら布教に活用していたことが知られる。

さて、今日羽黒の優婆堂で行われている年中行事は、四大祭と称される以下のものである。

一月十日　午前一一時より　九万九千日祈祷大般若法要
四月十九日　午後六時半より　逮夜
二十日　春季祈祷大般若法要
八月十九日　午後六時半より　逮夜
二十日　御盆施餓鬼法要
十月十九日　午後六時半より　逮夜
二十日　先祖代々塔婆供養法要
祈祷大般若法要

一月十日の「九万九千日」は、文字通りこの日に参詣すれば、九万九千日分お参りしたのと同様のご利益が得られるというもので、雪が積もっているにもかかわらず多くの人々が訪れるそうである。筆者は二〇〇八年八月二十日の御盆施餓鬼法要と、二〇〇九年四月二十日の春季祈祷大般若法要に参加させていただ

いた。前者の参詣者数は五〇名余り、白衣を身にまとった、講のメンバーらしき人も少くなかった。本堂前には施餓鬼棚が据えられ、「優婆尊信徒霊位（裏には流転三界中恩受）」、「有縁無縁三界萬霊（裏には流転三界中）」と書かれた二つの位牌が置かれていた。本堂内からこの棚に向かって、高徳寺住職を導主に伴僧八名で読経、供養し、それが終わると例によって巻子物の「優婆尊略縁起」が読み上げられた。その後、参詣者は優婆尊の前に進み出て、順に焼香する。その時、華報寺同様白衣姿の人が、数珠で一人一人の背中をさすって、「エエイ」と言いながら「お加持」をし、その後は流れ解散となる。しかし、白衣姿の人を中心に何人かが残り、優婆尊や二十講の御詠歌を唱えていた。尚、お堂側では、ろうそくやお守りは配布していたが、さすが腹帯は見かけられなかった。

後者の春季祈祷大般若法要は、高徳寺住職入院中のため、阿賀野市山崎・浄安寺（曹洞宗）の住職が導師を勤めた。導師が般若心経、観音経、除災妙音吉祥陀羅尼等の経文を唱えている間、一人の伴僧はもっぱら太鼓を叩き、二人の伴僧は、長持からしきりに般若心経を取り出してはパラパラと繰っていた。その間参詣者の中にはその伴僧に近づき、頭や背中の近くで般若心経を繰ってもらう人がいた。読経を終えた導師は、各人から依頼があった家内安全、身体健固、満願成就、万病消滅といった祈願内容を読み上げ、最後にはやはり「優婆尊略縁起」を披露し、各参詣者が優婆に焼香して終える。この時の参詣者数は、総勢二五名余りであった。その中に産婦とつき沿いの母親がいたので話を伺うと、口コミで知り五泉市からやって来た方で、当然安産祈願が目的であった。

もう一方（ひとかた）、五〇代後半の旧豊栄市在住の男性から話を聞くことができた。母親が優婆尊の信者で、以前は新潟市西蒲区（旧西川町）・貝柄講中の世話になっていた。三年前に母親が病気になってしまったことを契機に、また貝柄講の中心者、すなわちシャーマン的な資質を持った講主がなくなったので、羽黒に来て見ようという気になって妻とともにやって来た。その後ちょくちょく訪れるようになったという。貝柄講に世話になっていた時は、病院が近くになかったので薬草のことをよく教えてもらったり、子供の疳の虫を治してもらったり、子供の反抗期に助言を得て救われたという。お坊さんなども何やら相談にやって来る姿を見かけ、彼等にも彼等なりの悩みがあることを知ったという。この男性はこの時は一人で来ていたが、

先日友人を連れて来たら「家の中が平穏になった」と感謝され、その後友人は、一人でも来ているという。女性の参詣者が圧倒的に多い中に、このような男性の姿もチラホラ見受けられる。親を経てこの種の信仰を知るに至る他、悩みを抱える人の間に、口コミで広がっていく様子が見て取れる。

先にも引用した、昭和四十五年（一九七〇）刊『水原郷』によれば、「現在の講中は新潟市に一〇講中、新津（現新潟市）三、白根（現新潟市）三、西蒲原（現新潟市）貝柄一、村松（現五泉市）一、豊栄（現新潟市）三講中などがあって出湯をしのぐ」とある。[23] しかし、出湯・華報寺同様講の減少傾向は否めない。昭和六十三年（一九八八）に造成された玉垣の寄進者名を見ると、新潟市・貝柄講、赤塚講、北潟講、三条市・今井講、豊栄町・大瀬柳講、阿賀野市・次郎丸・上冬坂甘日待講中の他、（在所地不明の）栗山講、鳳友会の名が見られるにすぎなかった。この中の多くも、既に消滅し、今日では新潟市内に二講あるにすぎない。何らかの理由でシャーマン的資質を持った講主が欠けてしまうと、たちまち求心力を失なってしまう危険性をはらんでいるからである。

なお、安産祈願を目的に個人で参詣する人は、今ではそう目立つほどではない。しかし、三、四〇年前頃は、近在から多くの人が訪れてきた。例えば阿賀野市（旧水原町）堀越では、安産の神は羽黒の優婆様とされ、妊婦は優婆様に参拝してお参りする都度腹帯を納め新しい腹帯に取り替えた。いただき物は、オミコクと言われる大麦の粉で作った菓子であった。また、妊娠すると月の二十日毎にロウソクを一本持って行き、灯して安産を祈願したそうである。灯し残したロウソクは持ち帰り、紙に包んで仏壇にあげておいた。腹がやめてきた時に早く生まれるようにと、このロウソクを灯して祈ったという。[24] このようなトボシロウソクの習俗は、出湯や羽黒のそれのみにとどまらず、また対象も優婆尊に限らず、全国的に広く見られた習俗のようである。

（d）光明寺（阿賀野市里）

「本尊は阿弥陀如来、元和元乙卯年（一六一五）三月寺号公称、開基不祥、開山は蒲原郡出湯村華報寺十一世體巌長全和

尚にして、寛永元甲子年（一六二四）創立」という。[25] 優婆堂は本堂に向って左側手前にあり、真綿を被った半跏趺坐の木像で厨子に納められている。そうして、羽黒の優婆様の姉と伝えられている。かつては講中が存在し、年寄り七、八人を中心メンバーとして町内や近在の知り合いを呼んでよく賑やかしていたという。メンバーの中には特にシャーマン的資質を持った人がいたという訳ではなく、その点は出湯や羽黒の講とは異なる。しかし年寄りが徐々に亡くなり、およそ二十年前に自然消滅してしまった。一月十日の九万九千日には、羽黒の優婆様や賽の河原へ出向いていたようで、これについては今でも個人的に行っている人もいるそうである。また、毎月十九日が命日で、八月が特に盛大だったという。光明寺が現在行っている年中行事は、三月第二日曜日の涅槃会、八月五日の盆供養、十一月下旬の斎米（ときまい）供養の三つであるが、涅槃会の時に合わせて優婆様をお祀りしているにすぎない。しかし、お婆さんが孫の安産祈願をしたり、結婚して出郷した女性が安産祈願に訪れる姿も見られ、さらにはお礼参りにやって来る人も少くないという。

(e) 正竜寺（新発田市中曽根二丁目）

伝承によれば、聖篭村にあった真言宗の寺を中曽根に移し、のち天正元年（一五七三）に福勝寺十一世攝叟和尚が改宗開山したものという。[26] 華報寺と正竜寺との間には本末関係はないが、法類関係にあるという。明治十年（一八七七）に、華報寺・優婆尊の正竜寺への出開帳がなされたようで、関連史料が双方に現存する。先ず華報寺側の史料（川上貞雄家文書）は、「優婆尊発開扉（初）定約之事」と題するものであるが、いわば下書きで修正が顕しく、非常にわかりにくいものでしかも年号の記載がない（ただし二瓶は明治九年としており、他に史料があるのかもしれない）。それはともかく「今般華報寺元来什佛ノ優婆尊中曽根村正竜寺方へ出開扉之義依頼方ニ御越し相成候得共是迄扉（秘）佛ノ事故飽迄辞対（退）仕候得共不得止之御志願ヨリ仕其意ニ定約旨意ヶ條左ノ通リ」に始り、いつ出発し、誰がついてどう運び、どのように祀るか等六ヶ条の定約を取り替わした上で、ご開帳を実施したようである。正竜寺の要請に華報寺側は秘仏であることを理由に当初断っていたものの、正竜寺側に押されてやむをえず応ずるに至った経緯が、これによって判明する。

一方正竜寺側にも、この開帳を契機に優婆尊を造像して祀ったという記録が残っている。「聖籠山正竜寺優婆尊略縁起」がそれである。「（前略）其来由を尋るに去明治十年中有優婆尊を衆生結縁のため当山へ請じ奉り日数五日のあいだ供養し奉る折柄或夜の事なるに尊和尚の枕元にたちたまい告のこすは我レ此地に縁あり汝我が像を写して当山に祭ラバ永々国家を鎮護し善く郡民を救い二世安楽を得さしめん（後略）」。こうした夢の告げを得て、和尚は城主が愛でた二ノ丸御内脇の老松を入手して尊像を刻み、開眼供養を行い、寺院守護の尊と仰ぎ奉るに至った、という内容である。このように明治十年に出開帳したことになっているが、正竜寺側は当時流行していた華報寺の優婆尊を迎え入れ、それにあやかって寺院の隆盛をはかった模様である。その甲斐あってかその後参詣者が増え、講中も作られるようになって繁栄したという。

正竜寺の優婆尊は、本堂内正面右側に、薬師の厨子と並んで安置されている。しかも三躰の像とのことで、二尺強の高さの大ぶりのものを中心に、斜め前両脇に小ぶりのもの二躰を配したものという。かつては別に御堂があってそこに祀っていたものの、昭和三十六年（一九六一）の第二室戸台風で大破したため、本堂の修復に際してこちらに移したという経緯がある。昭和五十五年（一九八〇）あたりまでは、檀家を中心に近所のおばあちゃん達が毎月二十日頃に集まって念仏を唱えていたそうで、多い時は二〇人ほどの数になったという。今ではそうした光景も見られず、ほとんど忘れられた存在になっている。

以上、五ヵ寺の優婆尊信仰の歴史と現状を見て来たが、いずれも衰退傾向が否めず、華報寺と高徳寺のみがそれなりに信仰を維持しているにすぎない。それも安産・子育て祈願よりも、呪術宗教的職能者（シャーマン的資質を持った人）を講主として結集した人々、あるいは何らかの問題を抱えた人々による、病気治し、不安解消のための信仰、といった側面が強い点は否めない。

尚、曹洞宗寺院の扶植との関連でいえば、羽黒・高徳寺に関しては、優婆尊の存在が大きな役割を果たしたといえる。また、新発田市中曽根・正竜寺についても、曹洞宗寺院の基盤の強化に貢献したことは間違いない。その他の寺院に関しては、現段階では何ともいえないものの、優婆尊によって本寺の繁栄にあやかる、本寺との繋がりを示す象徴といった意味合いがあったのかもしれない。

華報寺とは直接法脈上の関係を持たないが、五泉市小浮（こうけ）・安穏寺（曹洞宗）も、本寺からの独立（末寺の創立）に際して、優婆尊を移祠した寺院の一つである。同寺はかつて真言宗福隆寺十二坊の一つであったが、天正元年（一五七三）に五泉町・興泉寺（茨城県龍ヶ崎市・金龍寺末、文亀元年―一五〇一―創立）六世昌山春林が曹洞宗に改宗したものと伝えている。[27] 伝承では、六世が本寺から優婆尊を背負ってこの寺に移られたという（隠居寺）。また、出湯・華報寺、羽黒・高徳寺のそれと並ぶ三大優婆尊の一つで、他寺院のそれは焼けてしまったが、唯一残るのはこの優婆尊のみとも言っている。数年前に先代住職がなくなった後、厨子の扉をあけて本尊の脇に祀るようにした。一紙物の由縁書もあって、それは安穏寺の創立年代に当たる天正発酉年銘の、興泉寺から安穏寺への優婆尊の譲り状でもあり、前半部分には、行基菩薩が出湯逗留中に刻んだ像であると、華報寺や高徳寺のそれと同様のことが記されている。

安穏寺のある五泉市小浮は、五頭山麓沿いの道を出湯から西に進んで阿賀川に至る位置にあって、かつて渡しがあった所として知られている。興泉寺とこれら三ヶ寺は地理的にも近く、影響関係にあったと推察される。五泉市土深の地蔵講に伝わる「興泉寺和讃」には、会津の中田観音（会津コロリ三観音の一つ）や出湯の優婆様が読み込まれており、このことも一つの証左となろう。尚、安穏寺には優婆尊に関する行事は特にないものの、檀家の中には赤ちゃんを身ごもった時や出産後に、お詣りに来る例が少なくないという。

四、地域の信仰と講の活動

(1) 地域の信仰

白山麓の五泉市（旧村松町）滝谷に慈光寺（耕雲寺同様、傑山能勝が応永元年に開山）があり、白山を水源とする能代川（のうで）が流れているが、この河川沿いに十王堂（庵）が数多く存在し、その中に優婆尊が祀られていることもある。五泉市羽下（はが）の十王院もその一つにほかならない。ちなみに羽下は、安穏寺がある小浮の対岸に位置する。十王院は古くは十王庵と称し、

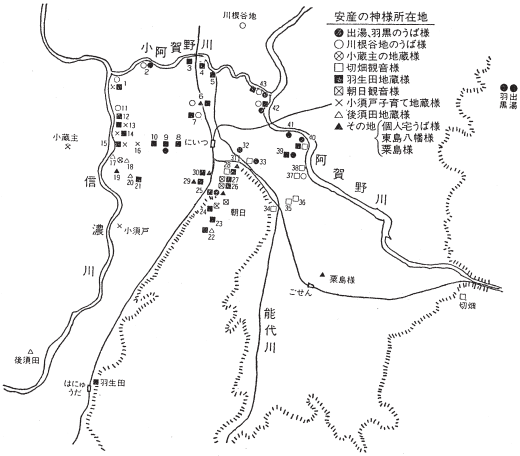

図２　安産祈願神仏分布図（岩野筌子による）

寛永五年（一六二八）に羽下の庄屋・伊藤家が創建したものである。正中元年（一三二四）創立の橋田・吉祥寺（慈光寺末）の末寺とされるが、今日では全く交流がないという。本尊釈迦岸尼のほか、十王、優婆尊等が祀られており、大正九年（一九二一）銘の優婆尊開限供養記念写真が十王院に掲げられている。登山家・藤島の随筆に記されていたように、大正期は出湯や羽黒の優婆尊信仰が盛んなりし時であり、その頃勧請したものと思われる。

昭和三十五年（一九六〇）頃までは優婆尊講もあって、毎月十九日のお逮夜には「一の木戸の優婆様の、お申しなされたお念佛、六体観音、六地蔵、七佛如来の御前文珠、十万奥の十三佛、三世諸菩薩、南無阿弥陀仏」といった優婆様和讃を唱えていたという。また、地域の人達が安産祈願にやって来て、ロウソクを灯して祈り、八尺八寸の晒の腹帯をもらい受けた。必ずお札参りにもやって来て、その時に新しい腹帯を返したと伝える。五泉市は機織が盛んな地域で、晒には不自由しなかったともいう。このように、地元の神仏に祈願する一方、出湯や羽黒の優婆尊に参詣する人も少くなかった模様である。この辺りには、安産の祈願対象となる神仏が数多く存在する。旧新津市（現新潟市

秋葉区）を例に見ると、阿賀野市出湯、羽黒の優婆尊、旧横越村（現新潟市江南区）川根谷内の胞衣姫さま、五泉市切畑の観音、同上町羽生田の地蔵等がよく知られていた[28]（図2参照）。出湯や羽黒の安産祈願の信仰圏は、旧新津市北東部から旧水原町、五泉町に広がっている。旧笹神村も当然信仰圏に入るが、蒔田では一月十日の九万九千日に出湯と羽黒双方に出向き、帰りには女堂の観音様に立ち寄って帰ったともいう[29]。

阿賀野市女堂には如意輪観音堂があって、ここは宝永五年（一七〇八）に長楽寺（太庵梵守開基、華報寺末）の如霖道実和尚が開設した蒲原三十三観音霊場の三十二番札所である。同霊場は、阿賀野市、五泉市、旧新津市、旧豊栄市、新発田市等下越のほぼ全域に及び、華報寺も二十番札所となっている。女堂では、一月十日を九万九千日と称して、二十講のメンバーが観音堂に籠り、参詣者を迎える。二十日講と称するようになり、毎月二十日に集まって和讃を唱えている。この講が伝える和讃には、「葬式の二十日様」、「送り念仏」、「重念仏」、「二十日待御詠歌」、「南無経大願」、「中田のくわん音様」、「信濃善光寺御詠歌」等の演目がある。善光寺和讃を基調として、中田観音のものを含む等、この地域に広く伝えられている和讃である。「葬式の二十日様」では、「一の木戸の　　優婆様云々」と詠われ、五泉市羽下・十王院で言う「優婆様和讃」そのものである。また「重念仏」は「しゃかにょらい　なむあみだ　しょうずかのばあ様　なむあみだ　いままくしょじん　なむあみだ、十王十体なむあみだ云々」といったもので、ムラの葬送儀礼には、「葬式の二十日様」、この「重念仏」のほか、「送り念仏」が唱えられている。優婆尊と葬頭河の婆は別々に歌い込まれており、別箇の存在と考えられている節もあるが、いずれにしても、優婆尊は子供の誕生といった人の生にかかわるのみならず、死（死後）をも左右する存在と見なされていたことがわかる。さらに興味深いのは「二十日待御詠歌」である。羽黒の優婆堂でも、行事の後に残った人々がこれを唱えていた。女堂に伝えられている『二十日待お念佛本』は、口承のものを書承化したもので、既に歌詞が崩れてしまったものをそのまま記しており、わかりにくくまた長くて恐縮であるが、そのままここに掲げることにしたい。

二十日待御詠歌

二十一番　勝尾の天樹寺
天照らす日かげ涼しき夏山の
たからの植木　たずる玉川

二十二番女堂
女堂や三ッも五ッも八ッ森も
西い行く身は　さわらなりけり

はるばるとまいりておがむ
一の木戸いつもたいせん　ごくらくのかぜ
五手箱二箱ここにぬぎすてて
かけごをぬぎていずくならん
五頭山やみねをたどりて
うばがたき佛のちかい　あらたなりけり
二十日のお月を待ち人は
じゅあくごじやくのつみのがれ
すぐに浄土へまいるべし
浄土のおつぼに花が咲く
なむあみだー　なむあみだぶつ

なむあみだー
一の木戸のうば様のお申しなされた
お念佛六代くわんのう　ろくいのじぞう
七佛如来のでぜんのもんじゅ
十万おくの十三佛　三千しょぼさつ
なむあみだー　なむあみだぶつ
ろくだいくわんのん　ろくいのじぞう
いせには神明大神宮　高野弘法大し
ならには大佛はせいのくわん音
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー
にういんくわん音ありがたや
維□にもつらぬく血の池の
とうのれんげをさしあげて
血の池苦言をのがるべし
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー
ごくらく浄土の真中に
はたおり姫とてひめござる
はたは何はたといきけば

地蔵菩薩のけさごろも
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー
ごくらく浄土いまいるには
あけずの内とて内ござる
金銀やべしよあくでない
念佛六字の明後であくである
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー
いっぺん申せばごくらくしよう
しょうねんがいけのれんげの花
一本ひらけば西へ光明佛
らいはいいらせたもう西へ浄佛
なむあみだー　なむあみだぶつ
おん極楽の初日のれんげの花
つぼみひらけみなみこうじの
らいごうじよいにはみうご
夜中のほけきょあかつき
ようぞうようぞうねんぶつ
じぞうぼさつまいるには

一日八日十日二十四日で
申したるお念佛すいじょう百文
血文経　八万余丈の血の池も
お念佛申せば生まるとある
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー
今まで申したるおねんぶつ
さいごのぎょねんとおぼしめし
浄佛とうげる其の時は
おねんぶつとないるひまもなし
なむあみだー　なむあみだぶつ
なむあみだー

「にういんくわん音」とは如意輪観音にほかならず、「浄佛」、「血文経」は成仏、血盆経の誤りで、「生まる」も「埋まる」であることは言うまでもない。この「二十日待御詠歌」は、冒頭蒲原二十三番霊場の女堂とふだん如意輪観音を預けてある隣の集落、勝尾にある天樹寺のご詠歌で始まっているが、二十日講に集結し、この念仏を唱えれば極楽往生間違いなし、といった内容で、そこには血の池地獄が盛り込まれ、救済者としての如意輪観音をさりげなく登場させている。ちなみに、女堂の如意輪観音については以下のような伝承がある。当地鉢盛城主、千坂伊豆守清胤が天正元年（一五七三）の春、狩猟の折に空海作の如意輪観音を得て城内に祀った。その後、五頭山麓勝尾村の枝郷炊出（かしで）の、病いにさいなまれていた長者の娘に譲り渡した。彼女は同集落の北端の地に御堂を建立し、自身は比丘尼となってこれを祀った、というものである。[30] 真言宗臭さが

漂うが、おそらく五頭山麓には、中世末頃から女性の堕地獄からの救済者としての如意輪観音信仰が広まっていたのだろう。それを葬頭河の媼とだぶらせつつ優婆尊信仰に仕立て上げ、活用したのが華報寺や高徳寺だったのではなかろうか。その証拠となるのが、明和六年銘の高徳寺蔵「血盆経」の版木である。いずれにしても優婆尊は、華報寺とその末寺にとどまらず、周辺各地で信仰され、しかも安産・子育て祈願の対象としてのみならず、さまざまな御詠歌に詠み込まれているように、死（死後）をも司どる存在と考えられていたことがわかる。

(2) 講の活動

最後に、呪術宗教的職能者の元に結集した優婆尊講について、三条市大竹講に焦点を当てながら報告したい。

新潟県下には、神懸りして神意を託宣する巫女（みこ）が今日でも少なからず存在する。「体の具合が悪くなってなかなか治らない。どうしたらいいか」「息子に縁談話があるが、良縁だろうか」。あるいは就職のこと、進学のこと等判断がつきかねる時に、人々は巫女を頼りにするのである。このことを「巫女に見てもらう」、「伺いを立てる」、「オトイアゲ」などと称している。巫女に依り憑く神霊は、稲荷だったり地蔵だったりするが、中にはウバ様（優婆尊）の場合もあって、次のような話が伝えられている。「長い間ウバ様を祀っているおばあさんが、ある日大般若経（折り本）を繰りながらお経をあげていると、突然おばあさんにウバ様がのり移って、体がピョンピョンと跳び上がりお告げをしたが、本人は少しも覚えていない。それからこのおばあさんに加持祈祷をしてもらうようになった」と。[31]

こうした巫女は、自宅に神霊を祀り、訪れ来る依頼者の要請に応えているのだが、家の入口に注連縄を張ることが多く、それなりにわかるものの、普通の家とあまり変わらないことから見つけにくい。筆者は市町村史の記述をもとに新潟市西区（旧黒崎町）大野と木場にある二軒を何とか捜し当てたものの、一軒はもう家もなく空地となっていた。もう一軒の方は当人が入院中とのことで会えず仕舞に終わった。しかし後者の木場のそれについては幸いにも町史に簡単に報告がなされていた。[32]

金剛山善徳院（宗派修験宗　本尊七面大菩薩、開山―御嶽修験宗管長釈覚正　開基―豊田覚連）

当山は昭和四十二年（一九六七）七月二十一日創建、開基は覚連である。開基覚連は俗称豊田ミサで、北蒲原郡笹神村の出であるが、豊田家は三代にわたり信仰篤く、お祀りしてある仏像は俗にウバ様といわれて附近住民の尊崇篤いものがあった。その一女ミサ女は父祖の伝承を継いでその道に帰依し、昭和三十五年（一九六〇）八月十五日に修験宗管長釈覚正の授戒を受けて法名覚連と与えられて当山を開創したものである

修験宗はともあれ、ミサ氏は出湯や羽黒のある旧笹神村の出身で、優婆尊を祀り、信者も多かったという。しかも三代にわたって優婆尊を篤く信仰したという珍しい家柄である。残念ながら病気療養中のためお会いできなかったが、華報寺で出会った三条市・大竹講の大竹ノイ氏に恐る恐る調査に出向かせていただきたい旨をお伝えしたところ、快諾して下さった。大竹ノイ氏は、別当であった姑の跡を継いだ二代目の講主である。講主（別当）は世襲という訳ではなく、本人にシャーマン的資質があって（あるいはお加持に長けていて）、しかも華報寺からその資格証を下賜されて始めてなりうるものである。先代の大竹たづ氏は、昭和二十六年（一九五一年）に華報寺廿九世岡田泰山禅師から別当の認可証をいただいている。初代のたづ氏は本家で厨子に入った優婆尊を祀っていたが、昭和四十年代半ば頃の隠居の折現在の分家の家に移り、別棟に厨子を安置して現在に至っている。先代は厨子を華報寺から汽車で東三条まで運び、そこから長い晒を厨子に結んで多くの信者がそれを持って先導する形で徒歩にて本家まで運んだものという。おそらくこの時に、御縁起と般若心経一巻（理趣分）[33]をもらい受けたものと考えられる。

二代目のノイ氏は、先代がなくなるとこれからどうすべきか途法に暮れていた時、華報寺の方丈さん（廿九世）に進められて二十一日間の修行に励んだ。食事は御飯一口ぐらいと水というように、仏と同じ程度（お供えと同じ程度の意）のものを食べただけで、般若心経を唱え続け、毎夜丑刻には頭に鉢巻をして二〇回水垢離をとった。そうしているうちに優婆様が

写真２　大竹講の「優婆尊の大祭」風景（2009 年 10 月）

降りてくる（憑依する）ようになり、昭和五十七年（一九八二）に別当の称号を、やはり廿九世の先代住職よりいただくに至った。最盛期には五〇人ほどの講員数を誇ったが、メンバーの高齢化が否めず、現在では三〇人ほどだという。三、六、九月の華報寺の行事の際は講員とともに参詣する。十月十七日は講で祀る優婆様の大祭で、華報寺の方丈さんを招きお焚き上げ、衣替えをしてもらう。これ以外に特に行事はないが、「大悲優婆尊日課」を毎日唱えるほか、さまざまな悩みを抱えた人々が相談にやって来るので、その人達への応待に忙がしいという。講のメンバーに限らず、市内はもちろんのこと五泉や新津、燕（つばめ）、寺泊のほか村上方面からやって来る人もいる。うつ病その他の病いの相談が多く、障りの要因をさぐり、その除去方法（方位にかかわるものが多いようであるが）を指示する。進学や就職、結婚に関する相談もあり、時には優婆様が降りてくることもあるという。

平成二十一年度（二〇〇九）十月十七日の大祭は午前十一時過ぎに始った。華報寺の方丈さんが先ず優婆尊の衣替えをする。見附市・石田講の講元石田八重氏

写真３　華報寺の大竹ノイ氏宛別当認可証

がその手伝いに当たった。衣替えが済むと、方丈さんが榊だろうか、一枚葉を用いて水を撒き（お祓い）、印を結んでから般若心経等を唱え、一巻のみ（理趣分）をパラパラと繰り、さらには祈祷・祈願内容と施主名を読み上げる。その間各自に香炉が回り焼香する。それが終わると方丈さんが優婆尊の御縁起を読み上げ、簡単な法話をする。以上が終了すると、例によって方丈さんから般若心経によるお祓いを受け、優婆尊をおまいりし、大竹講、石田講の別当より各自お加持をしてもらい、母屋の座敷でお斎（とき）となる。お斎は別として、華報寺の儀礼をそのままスライドさせたものということができる。

参加者は一七名、いずれも老婆で高齢化が著しい。実際足・腰の痛みにさいなまれている人も多く、優婆尊や別当さんに寄せる思いに圧倒された。あるお婆さんによれば、「一心に祈り続けると、優婆尊の眼が光り輝いて見えることがあり、ああ優婆尊と一体化したんだと思う。そうした経験が幾度かある」という。また、「病院へ通っても治らなかった病いが、別当さんのお加持で治った。別当さんには感謝している」、との声も聞かれた。ちなみに、衣替えした後の優婆様の古い衣装は、細かく切って病気相談者の患部に貼るなどするそうである。

結びにかえて

写真４　大竹講々主（別当）大竹ノイ氏（左側・右側は石田講々主）

仏教各宗派と民俗信仰との関連についてみると、真言宗と天台宗は神仏習合を生み出す基盤であっただけに民俗信仰との結びつきが強く、他方浄土真宗や日蓮宗は「内徒物知らず」、「固法華」と言われるように、排他性が強いとされている。その中間に位置するのが曹洞宗、臨済宗といった禅宗系の宗派、というのが一般的な見解である。こうした見方を確認するために、筆者はかつて浄土真宗地帯の民俗調査を実施したことがあり、各寺院の地域社会への浸透の仕方、受け入れる地域側の姿勢如何にかかわっていて一概に言い切れないことが判明した。[34] とりわけ地域の生活と不可分の関係にある末寺、地域社会に支えられて初めて存続しうる末寺にあっては、地域の意向（習俗）と妥協せざるを得ないことが少くない。だからこそ異宗派的構成をとる地域社会にあっては、葬送儀礼・祖霊供養は宗派を超えて共通であることが多く、僧侶の方も宗派を超えて共同で行事・儀礼を営むということがありうるのである。

小稿では、曹洞宗の民俗信仰に対する姿勢の歴史的変化を概観した後、曹洞宗の越後地方への扶植過程をトレースし、その上で下越地方の小本山・華報寺を事例として、信仰の特徴と地域の民俗信仰との関連について分析を試みた。曹洞宗にあっては、開祖道元を別として、民俗信仰を積極的に取り入れ、「神

人化度説話」なる霊験譚を活用しながら布教活動を展開した。峨山派にそれが顕著であり、越後曹洞禅の拠点・耕雲寺の開創者傑堂もその法脈に連なるもので、華報寺はその末寺にほかならなかった。また、曹洞宗寺院には、他宗派寺院を改宗・中興し開創したとする所も多く、その際他宗派の諸仏を排除せずそのまま取り込んでしまうケースがまま見られた。華報寺の場合、「神人化度説話」を持つ僧侶は確認できないが、真言宗（天台宗）寺院を改宗・中興し、従来の五頭山信仰（そのうちとりわけ優婆尊信仰）を積極的に吸収した。「華報寺略縁起」がその結晶であり、支院（末寺）の開創に際しても、華報寺信仰の象徴である、優婆尊の分霊を移し祀るという処置が少なからぬ寺院でなされた。さらに、近世中期以降は「血盆経」による女人救済を説くようになり、次郎丸・高徳寺の刷物に見られるように、女人の救済者を如意輪観音から優婆尊に差し替え、行事のたびごとに優婆尊略縁起を読唱し、その功徳を檀、信徒に説いてきた。そのため小稿で報告してきたように、優婆尊信仰は下越地方全域にまで広がったのである。

ところで、縁起で説く優婆尊のご利益は、「現世においては無病息災」、「後世においては速かに佛果を得る」、この二つであり、後者については御詠歌や念仏に信仰の一端が伺えるものの、どちらかといえば前者の現世利益を中心に信仰され、女人救済に関しても、安産祈願の対象として人々に受容された。そうして信徒個々人が参詣に赴くとともに、各地に講が結成され、信仰された。なおこの地方は二十日待が盛んであり「二十日待御詠歌」にはさまざまなホトケが取り込まれており、信仰の重層性、錯綜性を垣間見ることができるとともに、優婆尊信仰の根強さを伺い知ることができる。

ちなみに下越地方には、シャーマン的資質を持った巫女が数多く存在し、病気を中心とする災厄の除去、結婚・就職・進学等の悩み相談に対応している。そうした巫女の中には優婆尊を守護神とする人もおり、講を結成して華報寺や高徳寺（羽黒の優婆堂）を修行の場とする人が少くない。小子化社会、複雑な社会状況下の今日、安産信仰よりもこちらの方が盛んな点は否めない。寺院側も「別当」なる称号を認可するなどの形で、こうした状況を受け入れ、寺院側と巫女（別当）が連携する形で講が維持されているといえる。

以上のことをまとめると以下のごとくである。曹洞宗の本山にあっては、中世末以降所属寺院が地域社会に受容されやす

い施策を打ち出した。すなわち葬祭仏教化、改宗前の宗派の信仰の取り込み、「神人化度説話」の活用等がそれであり、一方最前線にある小本山、末寺は、これらを背景に地域社会の人々と接しながら布教のあり方、信仰のあり方を模索してきた。また地域社会の人々は、それぞれの宗教的欲求に基づいてさまざまな信仰を取捨選択する一方、社会状況の変化に対応しつつ独自の信仰を培ってきた。こうした小本山・末寺と地域住民とのかかわりの累積、いわば仏教の民俗化と民俗の仏教化との相互作用の歴史の中で、重層的かつ多様な民俗信仰が育まれてきたのであり、その一端を下越地方の曹洞宗寺院における優婆尊信仰の歴史と現状を通して確認することができた。

〔付記〕小稿の執筆に際しては、下越地方の各寺院、別当の方、信徒の方々に大変お世話になりました。逐一お名前をあげることはさし控えさせていただきますが、衷心より感謝申し上げます。

註

（1）松崎憲三「奪衣婆信仰の地域的展開～秋田県下の事例を中心に～」『日本常民文化紀要』二八集　成城大学大學院文学研究科　二〇一〇年　一七～五四頁。

（2）新潟県編刊『新潟県史　通史編2・中世』一九八二年　四九九～五〇八頁

（3）圭室締成『葬式仏教』大法輪閣　一九六三年　一三〇頁。

（4）清水邦彦「中世曹洞宗の地蔵信仰」『日本宗教文化研究』一二巻二号　日本宗教文化研究会　二〇〇八年　五三～五四頁。

（5）清水邦彦「中世曹洞宗の地蔵信仰」前掲論文　五四～五五頁。

（6）広瀬良広『禅宗地方展開史の研究』吉川弘文館　一九八七年　四一八～四二一頁。

（7）清水邦彦「中世曹洞宗の地蔵信仰」前掲論文　五四～五五頁。

（8）毒蛇調伏に関する説話が伝えられている。

(9) 市島春城『越後野忘』歴史図書館　一九七四年復刻　三四六～三四九頁。
(10) 『日本地名大系15巻　新潟県の地名』平凡社　一九八六年　九三五頁。
(11) 中野豈任『忘れられた霊場～中世心性の試み～』平凡社　一九八八年　一〇一～一〇二頁。
(12) 二瓶武爾「五頭山華報寺出湯温泉沿岸革誌（一）」『高志路』三－三　一九三七年　二一頁。
(13) 『総合佛教大辞典』法蔵館　一九八八年　一二〇一頁。
(14) 松崎憲三「おんば（御姥）様と奪衣婆についての予備的考察～」『神・人・自然～民俗的世界の相貌～』慶友社　二〇一〇年　五九～七二頁。
(15) 川上貞雄『五頭山華報寺と出湯温泉』私家版　二〇一〇年　六三頁。
(16) 藤島亥『越後の山旅』富士波出版　一九七六年　二六一頁。
(17) 新潟県教育委員会編刊『水原郷』　一九七〇年　二一九頁。
(18) 但し、次郎丸・高徳寺が管理する優婆尊は、羽黒に所在する。
(19) 川上貞雄『五頭山華報寺と出湯温泉』前掲書　六三頁。
(20) 水原町史編さん委員会編『水原町編年史』第一冊　水原町役場　一九七八年　一二五頁。
(21) 高達奈緒美によれば、熊野観音十界図・十王図・地獄絵等に画かれている救済者は、地蔵・如意輪観音・帝釈天などが見られるという（高達「血の池地獄の絵相をめぐる覚書」『地獄の世界』北辰堂　一九九〇年　六六九～六七一頁。
(22) 成瀬弘和『女性と穢れの歴史』塙書房　二〇〇三年　一七八～一八二頁。
(23) 新潟県教育委員会編刊『水原郷』前掲書　二二〇頁。
(24) 立教大学学芸員課程編刊『新潟県水原町堀越の民俗調査報告書』一九六八年　二〇頁。
(25) 水原町史編さん委員会『水原町編年史』第一巻前掲書　一六四頁。
(26) 新堀田市史編纂委員会『新堀田市史　下巻』新堀田市刊　一九八一年　九〇二頁。
(27) 安田町編刊『安田町史　近世編四』二〇〇四年　二七六～二七七頁。
(28) 新津市史編さん委員会『新津市史資料編6　民俗・文化財』新津市　一九九一年　七三～七七頁。

(29) 笹神村編刊『笹神村史資料編四・民俗』二〇〇二年　四二三頁。
(30) 松崎万作「女堂風土記」『五頭郷土文化』一二号　同研究会　一九八四年　一〇二頁。
(31) 新潟市史編さん民俗部会『新潟市史資料編10・民俗1』新潟市　一九九一年　五一六～五一八頁。
(32) 黒崎町史編さん委員会『黒崎市市資料編6・民俗』黒崎町　一九九七年　四一二頁。
(33)『理趣経』あるいは『大般若心経』の中の「理趣分」の本意は、理趣経曼荼羅を本尊とし、この経を所持する者は、悪魔外道に邪魔されることなく、四天王によって守護されるという。さらには、厄や災難に会うことなく、一切の仏・菩薩に守られて往生を遂げるという（松崎憲三『ポックリ信仰』慶友社　二〇〇七年　一七～一八頁）。
(34) 松崎憲三『巡りのフォークロア』名著出版　一九八五年　一六六～一七八頁。